x体験の研究（II）

——近世以降の日本の事例について——

米　沢　　弘

The Studies in x-experience（II）

Hiroshi YONEZAWA

This paper studies, on a comparative basis, various forms of personal spiritual "awakening", such as "beatific vision," that have occurred to followers of Buddhism, Shinto, Christianity and Yoga etc., from the beginning of modern history through the contemporary days. The sources, are ten persons, whose experiences are recorded in the form of personal accounts or their own books.

The author's main interest throughout the whole study has been (1) the process of those experiences having been verbalized, (2) the manner in which the concept of "god" in the broad sense of the term has emerged in each case and (3) the nature of relationship between such experiences and Japanese religious traditions.

本稿においては，x体験が何等かの形で頂上体験（peak experience）として結晶化される際に，その体験がどのように観念化されるかの問題について考えてみよう。この場合の観念化とは，体験の自己確認および伝達における言語化の意味で，とくに前稿（「x体験の研究Ⅰ」）において，x体験と"カミ"観念との関係について述べたので，この点を中心に検討を行うこととする。

x体験の観念化には，その前程として言語圏や宗教的伝統が大きく影響するので，時代と場所を限定し，江戸時代以降の日本におけるケースについて考えてみる。

この種の問題については，ウィリアム・ジェイムズの『宗教的経験の諸相』が豊富な資料を提供するが，非キリスト教文化圏の日本の場合を考えることは，さらにそれらの考察を補なうものと言えよう、

今回は第II章において，広義の意味での見神・見仏・見性また天啓やヨーガによるチャクラの目覚めなど，江戸時代から現代までの10のケースについて，自己記述の引用を主として考察するが，第Ⅰ章において，若干の基礎概念については，はじめに共通理解を得るために考えておこう。

Ⅰ　基本概念の共通理解のために

前稿において，x体験と"カミ"観念との関係についてのE．フロムの言葉を引用したが，わたしたちは多くの基本的な言葉を不明確のまま使用し，不用な疑似問題をかかえこんでいる。有神論と無神論，唯心論と唯物論といった対立も，多くはこの種の不用意な用語法に基づくと考えることができる。

バートランド・ラッセルは「哲学の最も重要な役割は，基本的であるとみなされがちな，そして無批判に受け入れられがちな観念を，批判し明確にすることである」とし「その実例として——心，物質，知識，経験，因果性，意志，時間」などがそれであり「これらの観念はすべて正確でなく近似的であり，あいまいさによって本質的に毒されている」とする。(注1)

一例として心と物質，またこれらの言葉に基礎づけられる唯心論と唯物論について考えてみよう。

ラッセルは，中性一元論(neutral monism)との関連で次のように述べている。現在では「物理学が物質をより少く物質的なものとした反面，心理学は心をより少く心的なものとした」とし「物質は世界の究極的な材料を構成する部分ではなく，さまざまな事象(event)を束ねる便宜的な一つのやり方にすぎない」と考える。そしてさらに「ウィリアム・ジェイムズの『意識』批判が示唆する『中性一元論』という教えはますます可能となっている」とし「わたちは心と物質の双方が，さまざまな事象を一群のものにまとめる便宜的なやり方にすぎないと考えている。若干の単純な事象が，物質的な一群にのみ属するということをわたしも承認するであろうが，他のさまざまな事象は両方の群に属するものであり，したがって心的であると同時に物質的なものである。このような教えは，世界の構造に関するわれわれの考えを非常に単純化する」とする。(注2)

さらに心なり物質について説明するが，それらについては意見のわかれるところであろうし，目下のところラッセルの心や物質についての考えを検討するのが目的ではないので，その説明は省略する。(注3)

次に，今回の考察と直接関係のある“カミ”観念について考えてみよう。具体的には次章においてさらに検討するとして，はじめにその形式的分類についてである。

日本語の“カミ”という言葉が通時的にどのように用いられて来たか，またそれが近隣の言語とどんな関係にあるかは，民族学の問題として興味のあるところだが，その問題は措くとして，基本的な共通理解のために，C.ハートショーンの“カミ”概念の形式的分類について考えておくこととしよう。なお神という言葉をさけたのは，最近では，しばしばそれを何等かの教義を前提とする場合に用いるからである。今回は“カミ”をその上位概念として使用する。

ハートショーンは“カミ”のミニマムな概念は,「何等かの方法で他より優れた存在」であると考え，その無限性とか完全性についての再検討が必要であるとする。(注4)

ハートショーンは，完全性について，次のような2つの次元のクロスの中で考える。

第Iは　絶対的か(A)，相対的か(R)，不完全であるか(I)の次元であり，

第IIは　すべての点においてか，ある点においてか，どの点でもないかの次元である。

この2つの次元の中で，次のような7つのケースが考えられる。

第1は　すべての点で絶対的で完全である場合(A)

第2は　ある点で絶対的に完全で，その他すべての点で相対的に完全である場合(AR)

第3は　いずれもある点で絶対的に完全であり，また相対的に完全であり，また不完全である場合(ARI)

第4は　ある点で絶対的に完全であり，その他の全ての点で不完全である場合(AI)

第5は　すべての点で相対的に完全である場合(R)

第6は　ある点で相対的に完全であり，その他の点で不完全である場合

(RI)

第7は　すべての点で不完全である場合(I)

(AはAbsolute, RはRelative, IはImperfectの略)

さらにこれらのケースは，3つのグループに分けられる。

第1のグループは　第1のケース（A）

第2のグループは　第2，3，4，のケース（AR，ARI，AI）

第3のグループは　第5，6，7，のケース（R，RI，I）

であり，ハートショーン自身によれば，

第1のグループは，絶対主義やトミズムや19世紀後半までの神学の立場であり，

第2のグループは，多くの現代のプロテスタント神学であり，

第3のグループは，単なる有限の“カミ”の教説や，ある形態の多神教や，また無神論もこの中に含める。

このハートショーンの“カミ”の形式的分類は，x体験の観念化の多様性を考えるために必要であろう。この種の形式的分類に加えて内容的に仏教で言う三身観，西方教会における三位一体，またそれと若干異るギリシャ正教の至聖三者といった考え，さらにヒンズーにおける同種の考えや，ヴィシュヌの化身といった考え方などともクロスして考えることにより，その適用は一層豊富となる。

また念のために付記すれば，ギリシャ的なパンテオンと，地中海的“カミ”観念を伝承する天使，聖人をも含むカトリック的な“カミ”観念，また胎蔵界マンダラや，日本的な八百万神といった表象方法は，その中に用いられる箇々の言葉は別として，全体としては同種の意義を持つものと了解することができる。そしてこのことは，第II章に述べる具体的ケースによっても追認されよう。

II　x体験の諸タイプおよびその観念化における諸問題

本章においては，x体験が典型的に示されるいくつかのケースにそって，体験者自身の説法や著述によって，それがどのようにして生れ，それがどのようにして伝達され，その際の観念化の特徴が何であるかについて考えてみる。

今回は，説明は最少限とし，具体的に原文の引用を主とし，その比較により，この種の体験の多様さと，それから生ずる問題点について「記述と了解」の立場で自ずと理解できる範囲において考えたい。

II—(1)　盤珪禅師の『御示之聞書』(注5)から

前稿において，主として日常言語による宗教体験の伝達の面から，盤珪禅師（元和8年～元録6年）について述べたので，はじめに盤珪禅師において，どのように頂上体験が行なわれ，それがどう観念化されたかを考えてみよう。この場合の観念化とはすでに述べたごとく，自己との対話ないしは確認と，自己の体験の伝達のための観念化，言語化との二つの意味を持つが，後者については，前稿に述べたごとく，盤珪禅師自身とくに注意された点である。

盤珪禅師は幼年時代に儒教を学び，『大学』の素読を行ううちに「明徳」とは何かを明らかにするため参禅するわけだが，禅師の苦修はよく知られるところである。

「あまりに身命をおしみませず，五体をこつかにくだきましたほどに，居しきが破れまして，座するにいかふ難儀致したが，其頃は上根にござって，一日も横寝などは致さなんだ。……その数年のつかれが，後に一度に発りて，大病者に成まして，彼明徳がすみませず，久しう明徳にかかって，骨をおりましたわいの・……それから病気がだんだん次第にお

もって，身が弱りまして，後には痰を吐ますれば，おやゆびのかしら程なる血の痰がかたまって，ころりころりとまん丸に成って出ましたが，或るとき痰を壁にはきかけて見ましたれば，ころりころりとこけて落ちる程に，ござったわひの，此とき庵居で養生せよとみな申によって，庵居しまして，僕一人つかふて煩(わずら)ひ居ましたが，さんざん病気が指つまりて，ひつしりと七日程も，食物が留り，おもゆより外は通りませいで，それゆへもはや死ぬる覚悟をして，思ひましたは，はれやれ是非もなき事じやが，別而(べつして)残多事も外にはなけれども，唯平生の願望が成就せずして，死ぬる事かなとばかり思ひ居ました。おりふしにひよつと一切は，不生でととなふ物を今まで得しらひで，扨々(さてさて)むだ骨を折た事かなと思ひ付まして，漸と従前の非をしつてござるわひの。

又それから気色がはっきりとして，よろこばしう成て，食きげんが出来，僕をよびまして，粥をくらふ程にこしらへよと申たれば，今まで死かかつて居た人の，不思議な事をいはるると，僕もおもひながら，悦びまして其ままいそぎふためいて，粥をこしらへ，少しなりともはやく喰せうとおもひ，まず，粥をくはせましたが，まだろくに煮へませぬ，ぼちつく粥をくはせましたが，かまはず二三椀たべてござれども，あたりも致さず。それより段々に快気いたし，今日まで存命(ながらえ)居まする事でござる。……それより以来天下に身どもが三寸の舌頭にかかるものがござらなんだわひの。」

盤珪禅師は，常に「仏心は不生にして霊明」と説かれ，また「霊明の徳用」とも言われる。ここには，「明徳」という言葉の意味するものがより深く含まれていると考えられる。

また不生については真言の阿字本不生との関係も考えられようが，必ずしも適切な言い方ではないが，不生という言葉を存在論的な用法にとどまらず，広い意味での実存的意味に用いるのが盤珪禅師の特徴であろう。

「不生不滅と云う事は，心経一巻誦む人は知りたることなれど不生の根源をしらず，只分別料簡を以て，此道を得成仏せんと思ふ。わずかに仏を求め道を得んと思へば直下に不生にそむき，生れ附に差ふ也」と言われ，また「心上に心を生じ，不生にならうとするは，誤なり。本来不生也，皆不生の理(ことわり)と云はるるが，不生には理はなき也。理でもあれば，不生でなし。」と説かれる。

盤珪禅師における不生の意味，またその重要さについては，前稿に述べたので省略する。

公案禅との関係については「円悟大恵より己前の宗師も，話頭を提撕せられたるか。」と述べられ「今時の人，古人も疑ふた程にとて，疑を生るは疑のまね也。」と言はれる。

公案禅について考えるためには，白隠禅師(貞享2年～明和5年)の開悟のプロセスについて考えることが必要であろう。白隠禅師の場合はよく知られているところだが，念のために説明なしに引用しておくこととしよう。

II―(2)　白隠禅師の『遠羅天釜』(注6)**から**

「二十四歳の春，越の英巌の僧舎に在って苦吟す。昼夜眠らず，寝食共に忘る。忽然として大疑現前して万里一条層氷裏に凍殺せらるるが如く，胸裡分外にして清潔に進むこと得ず，退くこと得ず，癡々呆々として只無の字あるのみ，講筵に陪し，師の評唱を聞くと雖も，数十歩の外にして堂上の議論を聞くが如し，或は空中に在って行くが如し。

此の如き者数日，乍(たちま)ち一夜鐘声を聴いて発転す，氷盤擲砕するが如く，玉楼を推倒するに似たり，忽然として蘇息し来れば，自身直ちに是れ巌頭和尚三世を貫通して毫毛を損せず，従前の疑惑底を尽して氷消す，高声に叫んで曰く，也太也太奇，生死の出づべき無く，菩提の求むべき無し，伝灯千七百箇の葛藤，一揑を消するに足らず。

此に於て慢幢山の如くに聳え，憍心潮の如くに湧く，心窃(ひそか)かに謂へらく，二三百年来予

が如く痛快に打発する底之あるべからずと。一段の所見を荷うて直ちに信陽に行く。正受老師に謁して所見を演べ偈を呈す，師左手に言偈を握って曰く，

『者箇はこれ学得底，那箇が是れ見得底』といって右手を伸ぶ。予曰く『若し見得底の師に呈すべきあらば，須らく吐却すべし』といって嘔吐の声を成す。師曰く『趙州の無字作麽生か見る。』予が曰く『無字甚麽の手脚を著くる所か有らん。』師指を以て予が鼻を拗つて曰く，『多少が手脚を著けられり』予擬議す。師大笑して曰く，此の守蔵窮鬼子と，予顧みず，師曰く『你恁麽(なんじいんも)にて足れりと為るか。』予曰く『甚麽の不足の処か有らん』師南泉遷化の話を挙す。

予耳を掩うて出ず。師曰く『闍梨』，予首を回らす，師曰く『此の守蔵の窮鬼子』と，一夕師納涼して担端に坐す。予亦偈を呈す。師曰く妄想情解』，予高声に叫んで曰く，『妄想情解』と，師即ち予を捉住して瞋拳二三十，終に堂下に突き落す。

時に五月四日夜，霧雨の後なり，予泥土の上に在って偃臥して気息共に尽く，去死十分，動も亦得ず，師坦上に在って呵々大笑す，少らくあって蘇息し起き来って作礼す，通身汗流る，師高声に叫んで曰く，『此の守蔵の窮鬼子』と。

此に於でて親しく南泉遷化の話に参ず。寝食共に廃す。一日些の省覚あり，入堂種々下語すれども契はず，只いふ『守蔵の窮鬼子』と。予心に窃(ひそか)に謂へらく，辞し去って他方に往かんと。一日城下に往いて托鉢す，狂人あり，茗箒を把って予を打たんと欲す。予覚えず南泉遷化の話を打破す。其余の数段の因縁，疎山寿塔の話，大慧荷葉団々の頌，自ら謂へらく，尽く打破すと。帰り来つて所見を演ぶ。師総に可否せず，只微々として笑ふのみ，此より守蔵の窮鬼子といふことを休む。其後省悟大いに観喜する者両三回，恨む所は語路到あり，不到あり，平生灯影裏に行くが如し。

（中略）

一日息耕老師。南浦和尚を送るの偈に『相送れば門に当りて修竹あり，君が為めに葉々清風を起す』といふを看読して大いに歓喜す。夜光を暗路に獲るが如く覚えず高声に曰く，『我れ今日始めて言語三昧に入得せり』と，立って礼拝す。その後行脚して路勢陽を歴て一日大雨を衝いて行く，雨水膝に致る。廓然として深く荷葉団々の句中に入得す。歓喜立つことを得ず，身を放って水中に倒る。起立することを忘却して腰包皆浸す，行人怪しみ立って扶け起す。予呵々大笑す。人皆以って狂せりと為す。その冬泉州信田の僧堂に在って夜座す，雪を聴いて得所あり，習年濃東霊松の僧堂に在って経行，勿然として従前多少の所得を打失す，大いに歓喜す。」（元漢文）

なお，念のために追記すれば，白隠禅師は19歳の時に，この引用にも出てくる巌頭和尚が賊難をまぬがれなかったことから参禅弁道に失望し「此に於て大いに懊悩す。食はざること三日，永く望みを仏法に絶つ。仏像経巻を見ること泥土の如し。専ら俗典を読み詩文を弄し少しく憂愁を忘る。」といった経験が先行していることにも注目しよう。その後『禅関策進』を得て再び求道に専念したことはよく知られているところである。

また念のために，今回の考察に関係のある記述を，同じく『遠羅天釜』の中から，二つほど引用しておこう。

一つは法華経との関連で，もう一つは念仏との関連で述べられたものである。

「其極処に致っては，法華経と云ひ，無量寿仏と云ひ，禅門には本来の面目と云ひ，真言には阿字不生の日輪と云ひ，律家には根本無作の戒体と云ふ。皆是一心の異名なりと覚悟致されるべし。」（「法華宗老尼の問に答へる書」から）

「光明遍照十方世界と。蓋し光明と世界と両般の会を成じ玉ふべからず。悟るときは，十方世界草木国土を全ふして，直に是れ如来清

浄光明の真身とし，迷ふときは如來清浄光明の真身を全ふして，錯って十方世界草木国土とす。」(「念仏と公案の優劣如何の問に答へる書」から)

II—(3)『金光大神覚』(注7)**から**

金光大神（文化11年～明治16年）については前稿において述べたように，信仰が年とともに深化することが，自伝『金光大神覚』からうかがわれるが，農作業を止め広前での取次に専念するようになった部分，教団で「立教神伝」とよぶ部分を引用するにとどめる。『金光大神覚』の自筆原文は所在不明だが，二代目取次者による写本が残されている。なお最晩年にまでいたる自筆の手記『お知らせ事覚帳』は一昨年（1983年），新教典『金光教教典』の中で公刊された。

「金光大神，この幣切り境に肥灰さしとめるから，その分に承知してくれ。外家業はいたし，農業へ出，人が願い出，呼びに来，もどり，願いがすみ，また農へ出，またも呼びに来，農業する間もなし，来た人も待ち，両方さしつかえに相成る。なんと家業やめてくれんか。其方四十二才の年に病気で医師も手を放し，心配いたし，神仏願い，おかげで全快いたし，その時死んだと思うて，欲を放して，天地金乃神を助けてくれ。家内も後家になったと思うてくれ。後家よりまし，もの言われ相談もなり，子供つれてぼとぼと農業しょうてくれ。此方のように実意丁寧神信心いたしおる氏子が，世間になんぼうも難儀な氏子あり，取次ぎ助けてやってくれ。神も助かり，氏子も立ち行き，氏子あっての神，神あっての氏子，末末繁盛いたし，親にかかり子にかかり，あいよかけよで立ち行く，とお知らせ。一つ，仰せどおりに家業をやめてお広前相勤め仕る。安政六己未十月」

この短い引用からも，金光教の特徴がよくうかがわれる。前稿にも述べたように，盤珪禅師の法語と，金光大神の信徒への教えを記録した『金光大神理解』は，日常の話し言葉による宗教体験の伝達の記録として，近世日本における最も優れたものと考える。

金光大神における，信仰の対象である“カミ”の名前がどう変って行くかは前稿に記した。

なお，金光大神は「もとをとって道を開く者は，あられぬ行もすれど，後々の者は，そういう行をせんでも，みやすくおかげを受けさせる。」と言われる、同種のことは盤珪禅師においてもしばしば語られる。

金光教の特徴は「お取次」であると言われるが，これについても前稿について見られたい。

II—(4) 山崎辨栄上人の著作(注8)**から**

浮土系の見神，見仏については，山崎辨栄上人（安政6年～大正9年）の場合について考えてみよう。

光明主義の提唱者として知られ，広く仏教のみならず当時の近代科学にまで造詣の深かった辨栄上人について，今回はその見仏および本尊観を中心に遺文から考えてみよう。

「辨栄自ら謂ふに，幼時十二歳，家に在りし時杉林の繁れる前に在りて西の天霽(は)れわたり，空中に想像にはあれど三尊の尊容儼臨し給ふことを想見して何となく其霊容に憧憬して自ら顧ずらく，我れ今此の想見せし尊容を霊的実現として瞻仰し奉らんと欲して欽慕惜くこと能はざりき。後二十四の時に東京駒込の吉祥寺学林に於て卍山上人の五教章の聴講に列なりし時，田端の東覚寺に寄宿して吉祥寺に通ふ往復にも口に称名を唱へ意に専ら弥陀の聖容を想い専ら心を凝しけるに，一旦蕩然として曠廓極まりなきを覚え，其時に弥陀の霊相を感じ，慈悲の眸，丹花の唇等，其霊容を想う時身心融液にして不可思議なるを感ず，其後は常に念に随って現ず」(『不断光附仏法物語』から)

また「予，曾て華厳の法界観門に由って，一心法界三昧を修す。行往坐臥常恒に観心止まず。或時は行くに天地万物の一切の現象は

悉く一心法界の中に隠没し，宇宙を尽して唯一大観念のみなるを観ず。また一日道灌山に禅座して文殊般若をよみ，心如虚空無所住の文に至って，心虚空法界に周徧して，内に非ず，外にあらず，中間にあらず，法界一相の真理を会してのち，心常に法界に一にせるは是れ平生の心念とはなれり。之れ即ち宗教の信仰に所謂，光明遍照中の自己なり。大円鏡智中の自己なりと信ず。宇宙は一大観念の光明たることにつきて疑を容るに地なし」(『無辺光』から)

また，目下問題として考察しようとしている見神・見仏とは何かについては，

「見仏と言はば幼稚なる者の観念には，見仏は若し三昧発得せば肉眼に対して玲瓏たる皎月雲間より現れるを目撃する如く，心眼にても自己の心眼に対して客体として全く向ふに現はれたるを自己の心眼に反映すること肉眼の如くなる哉と，此に就て暫く自己の経験に基き説明せば，世界の相対的なると霊界の絶対的なるとの区別を知らざるべからず。肉眼の感覚は相対的にして，自己の肉眼と所対の物色との関係によりて視ることを得。例へば人の眼より，太陽ありて視ゆ。如来は自然界の太陽の如くに相対的関係にあらず。絶対の心霊界に対すれば，吾人の心霊は全体の分現なる自己の心霊なれば，如来大心海中の自己の霊波なれば，自己の根底なる大心海より自己の心霊に現ずるなり。」(『光明の生活』から)

では辨栄上人が，どのような“カミ”観念を持っていたかを見てみよう。それは本尊観について述べられている部分である。

「宗教上の己が帰命信頼するの本尊観は其人の宗教意識の低きと高きとに依て必ずしも同一ならず。意識の幼稚なる物は神に対する観念も随って低い。(中略)

然して其精神が高等に進むに随って神の観念も亦高度である。又高度に進みたる宗教の本尊観にも其性質同じからず。一神教と汎神教と超在一神教的汎神教とである。

初め一神教と云うのは宇宙の唯一の神の存在を信じ真の神格なるものは天に在ます一人の父のみ。其他一切の造られたる万物には本本神の性存在せぬのである。唯精霊に感ずる性，神に救はるる性あるのみと。

二に汎神教は其反対に一切の衆生は悉く神性を具備して居る故に自己の霊性開顕する時は自己是神である。即ち直指人心見性成仏にて自己の仏性を開見する外に神の要なし。古仏と云ふは往昔の人が自性を発見して仏と成ったのである故其れを自己の模範とは為すべきものの，仏の救いを求めて我に於て何か為んと。

三に超在一神的汎神教とは本有唯一の独尊の存在を信ずると共に，一切衆生は皆其大霊の分身たる霊性存するの故に之を開発すれば神と為り得らるる。然れども唯一絶対の本仏の分子なれば亦本仏の法則と霊力とに預らざれば成仏すること能はざると。

かやうに三種の中に於て第三の超在一神的汎神教が吾人の宗教観の独尊説とす。」(『人生の帰趣』から)

また上人の言ふ「ミオヤ」とは，

「ミオヤは，宇宙唯一の独尊であります。然れども，一切衆生の為めに，三身に分れて一切の世界と及び衆生を生産し，また霊界を摂取し給う」とする。(同上)

三身観についての詳細な説明は省略する。

II—(5) 綱島梁川著『予が見神の実験』(注9)**から**

綱島梁川氏(明治6年～同40年)の見神体験は明治37年に3回にわたって行なわれた。梁川は「見神の実験」と言うが，それは改めて述べるまでもなく実際の経験の意味である。同氏の「予が見神の実験」の中から，見神について具体的に述べる部分を引用しよう。

「神の現前若しは内住若しは自我の高挙，光耀等の意識につきては，事に触れ境に接して，予がこれまで屢々躬ら経たる所なりしが，而かもその不磨の記憶となりて永く後ちに残る

程の奕々たる触発の場合は，幾んどあらざりし也。その是れありしは，昨三十七年の夏以後の事なり、今後は知らず，昨一年は予の宗教的生活史に於ける，謂はば，光耀時代，啓示時代なりきとも見るべく，予は実に昨一年間に於いて，不思議にも三たびまでもこれまでに経験したることなき稍々手答へある一種稀有の光明に接したるなり。而して其の最後のものを以て最も驚絶駭絶とす。

最初は昨年七月某日の夜半（日附を忘れたり）に於いて起こりぬ。予は病に余儀なくせられて，毎夜半凡そ一時間がほど，床上に枯坐する慣ひなりき、その夜もいつもの頃，目覚めて床上に兀坐しぬ。四壁沈々，澄み徹りたる星夜の空の如く，わが心一念の翳を著けず，冴えに冴えたり。爾時，優に朧ろなる，謂はば，帰依の酔ひ心地ともいふべき歓喜ひそかに心の奥に溢れ出でて，やがて徐ろに全意識を領したり。この玲瓏として充実せる一種の意識，この現世の歓喜と倫を絶したる静かに淋しく而かも孤独ならざる無類の歓喜は凡そ十五分時がほども打續きたりと思ぼしきころほのかに消えたり。（中略）

予は未だありしこの夜の經験の深きこゝろを測りつくし，辿り盡くすこと能はず。今なほ折々當夜の心状を朧ろに想起しては，天上生活の面影をしばし地上に偲ぶの感あるなり。

今一つは昨年九月末の出来事に繋れり。予は久しぶりにて，わが家より程遠からぬ湯屋に物せんとて，家人に扶けられて門を出でたり。折しも霽れ渡りたる秋空の下，町はづれなる林巒遠く夕陽を帯びたり。予はこの景色を打眺めて何となく心躍りけるが，この刹那忽然として，吾れは天地の神と偕に，同時に，この森然たる眼前の景を観たりてふ一種の意識に打たれたり。唯だこの一刹那の意識，而かも自ら顧みるに，其は決して空華幻影の類ひにあらず。鏗然として理智を絶したる新啓示として直覚せられたるなり。予は今尚ほ其の折を回想して，吾れ神とに観與たりてふその刹那の意識を批評し去る能はず。

終はりに語らんとするもの，是れ曩に驚絶駭絶の經験と言ひたるものにして，これまで予が神の現前につきて經験せるもののうち，かくばかり新鮮，赫奕，鋭利，沈痛なるはあらじと思はるる程なり。予は今なほ之れを心上に反覆再現し得ると共に，倍々其の超越的偉大に驚き，倍々其の不動の真理なるを確めつゝあり。左に（下に）掲ぐるは，當時の光景を略叙してさる友に書き送れる書翰の大旨なり。

（中略）

本年のうち小生はこれと併せて三たびほど触発の機會を得申候。他の二つの場合（前に陳べたるものを斥す）も今憶ひ出だし候てだに心跳りせらるゝ一種の光明，慰籍に候へども，先日御話いたしし實験は，最も神秘的にして亦最も明瞭に，インテンスのものに候ひき，君よ，この特絶無類とも申すべき一種の自覺の意をば誰れと與にか語り候ふべき。げに彼の夜は物静かなる夜にて候ひき。一燈の下，小生は筆を取りて何事をか物し候ひし折のことなり，如何なる心の機（はずみ）にか候ひけむ。唯だ忽然はっと思ふやがて今までの我が我ならぬ我と相成，筆の動くそのまゝ，墨の紙上に聲するそのまゝ，すべて一々超絶的不思議となつて眼前に耀き申候。この間僅かに何分時といふ程に過ぎずと覺ゆれど，而かもこの短時間に於ける，謂はば無限の深き寂しさの底ひより，堂々と現前せる大いなる靈的活物とはたと行き會ひたるやうの一種のShocking錯愕，驚喜の意識は，到底筆舌の盡くし得る所にあらず候。唯だ兄の直覺に訴へて御推察を乞ふの外之れなく，今はその萬一をだに彷彿する能はず候。

兄よ、如何にか思ひ給ふ，小生の如き一面隨分批評的，學究的精神をもてるものに，このやうな東洋的，中世紀的とも

申すべき神秘的實験あるべしとは如何にもあり得まじき不思議事と思ひ給はずや。小生自身にも其の後両三日の間は，何だか狐にでもつまゝれたるやうの心地いたし候ひしが，程たつに従ひ，件の自覺は益々明瞭と相成，其の驚絶の事實は，不壊金剛の真理となって光明を放ち来たり申候。今日は最早一點動かすべからざる疑ふべからざる心靈の事實となり，力と相成申候。（下略）

これ實に昨十一月の某夜，十一時頃に起こりたる出來事なりとす。予はこの實験につきては，最早言ふ所なかるべし，そは如何なる妙文辭を傭ひ來たるとも，最早こゝに書き記したるより以上の事を説き明かし得べくも思はれざれば也。真理は簡明也。真理自らを語らしめよ。言詮の繁重は真理の累也。

さはれ予は件の見神の意識につきて，今一つの言説すべき者あるを感じたり。そは他にもあらず，予が曩に「我が我ならぬ我となりたり」といひ，「靈的活物とはたと行き會ひたり」と言へるが如き言葉の，尚ほやゝ疎雑（ルーズ）の用法ならざる乎との疑ひ，讀者にあらんかとも思ひたれば也。されば，予をして今一度最も厳密に件の意識を言ひ表はさしむれば，今まで現實の我れとして筆執りつゝありし我れが，はつと思ふ刹那に忽ち天地の奥なる實在と化（な）りたるの意識，我は没して神みづからが現に筆を執りつゝありと感じたる意識とも言ふべき歟。これ予が超絶，驚絶，駭絶の事實として意識したる刹那の最も厳密なる表現也。予は今，これ以上，又以外にこの刹那に於ける見證の意識を描くの法を知らざる也。予は如是に神を見たり，如是に神に會へり。否見たりといひ會へりといふの言葉は，なほ皮相的，外面的にして，迚もこの刹那の意識を描盡するに足らず，其は神我の融會也，合一也，其の刹那に於いて予みづからは幾んど神の實在に融け合ひたるなり。我即神となりたる也。感謝す，予はこの驚絶，駭絶の意識をば，直接に，端的に，神より得たり，一毫一絲だに前人の證権を媒とし，若しくは其の意識に依傍したる所あらざる也。（彼等が間接なる感化は言はず。）（「予が見神の実験」から）

同氏は少年時代，組合派の教会の信徒となってから20歳前後まで，熱心なキリスト教信者であった。また西洋哲学，仏典などにも詳しく，カトリックやイスラムの神秘思想にまで言及する。

では“カミ”について，見神以後，どのように考えたかを，引用によって見てみよう。

「汝の所謂神は無相の神か，有相の神か，絶対神か，差別神かとの貴問に対しては，他日の詳答に譲りて，今は唯だ簡単に二者いづれも自分の実態の対境たる神に有之（これあり）とのみ申止め候べし。一は実有一如の神にして，他は理想発展の神に候。如來若しくは天父の人格神，差別神の，慈悲，光明，正義等の理想を渇仰すると共に，所謂無位の真人たる絶対神を観じて，自家本來の面目を思ふは，我等が宗教的意識に並び行はれて相戻らざるの事実に候。窃かに信ずるに，進みたる宗教的意識は此の実相の神と進化之神との二面の包摂にあるべく候。此くして我等が凡（ママ）神教的要求と一神教的要求と，寂静的，美的静観の要求と活動的，道徳的健闘の要求と，此一意識の中に満足の発展解釈を得べく候。而して此の意識を極と立て候へば，今の基仏両教の（勿論大体上の）長短歴々たるべく候。随って我が将來の宗教の振って立つべき新根底もおのづから彷彿せらるべくと存候。」（「答道友書」から）

II—(6) 円応教教祖『遺文集』(注10) から

深田千代子教祖（明治20年～大正10年）は円応教の創唱者である。多くの宗教の教祖の場合，もともと宗教に関心があり信心深いという場合が多いが，円応教の教祖の場合は，大阪の町中で，数え年33歳の必ずしも信心深いとは言えない，また宗教をさけていたとも言える女性がどのように天啓を受けたのだろうかを見てみよう。

円応教の教祖の場合，ぼう大な量の遺文が残されているが，その中に9種類の自叙文があり，啓示体験について何ケ所かでふれられている。その中から一つだけ引用しておこう。

「世の事は余り知りませず　内で針仕事して居りましたが　三十三歳の四月頃より　何でも心によくわかり私が思いましたらその通りになりますし　又私は何も思いはありません故に　誰でもわかるのかと思い人にも話さず又主人が何をしられても早くわかりますけれども短気故に何も申上げず　余り早くわかります故　若し命でもなくなるかと思い一寸神経つくり　又働くには何のいさいもなきものですから知らぬふりして七月までおりましたが（大正八年）七月十六日の日に　心でよくわかりて　顔の姿かえて　主人を膝元へ呼びましていろいろ申し　そのあとで　この女生れつきより　そなわり　四十になれば神の使いしめに生れたが　余り世の中が進み七年早く行人となり　姿で働くか　霊で働くかとの申し渡し致しましたから　主人は姿で働かしますと申しまして　四日程は心はよくわかりて居りまして口の先でかたこと申して……。」（三十五歳　四月五日の日付がある）

円応教教祖の遺文は美しい文字で書かれているが，同教祖は幼年時代，家計が苦しかったので一日も学校に行かず，子守をしながら字を習い，土の上に字を書いてけいこしたと言われる。

その遺文の中から，いくつかを引用しよう。

「真理研究するには　人様に向かう時は他力我一人の時は襖畳柱壁が怖いと思い　それにつけて　すべ板の我一人のゆるみなき心が一の自力と悟り」

「私は　神が罰は当たりませんと思います人一人に神も仏もあるから　人は死ぬ時でなければわかりませんと思います」

「神仏は　深き心ながき研究ゆえ　心穏かに研究致し下され」

「あなたは　何を祈っているかと申されましたから　私は　祈るものはなんでも祈ります」

円応教には独特な二人が向い合って坐る修法があるが，別の所で述べたので，それについて見られたい。（付注参照）

なお，念のために，神がかりの諸タイプについて簡単に述べておこう。普通それら3つのタイプがあると考えられる。第1は1ペルソナ型，第2は2ペルソナ型，第3は幻覚型である。円応教の教祖の場合，当初の4日間は第1のタイプで，日常の意識は失われ，神がかりの状態が全人格を支配する。よく知られるのは天理教の中山ミキ教祖の場合である。第2のタイプは神がかりのペルソナと日常意識のペルソナとの対話が行なわれる場合であり，大本教の出口ナオ教祖の初期の場合，また「踊る宗教」として知られた天照皇大神宮教の北村サヨ教祖の場合はこの典型的例である。第3のタイプは旧約の予言者などよく見られるもので，近年ではルルドやファティマの聖母出現はこのタイプである。

II—(7)　浅野和三郎著『心霊講座』（注11）**から**

浅野和三郎氏（明治7年～昭和12年）は日本における心霊研究のパイオニアとして知られる。海軍機関学校の英文学の教官であった大正4年に心霊現象にふれ，その後心霊研究に専念するのだが，一時大本教と関係するがやがて別れ，戦前の心霊研究の代表的な研究者として知られている。

以下，同氏が鎮魂により守護霊を見る体験を同氏の著書から引用しておこう。

「其翌大正五年の春になると，私自身は鎮魂によりて靈的體験を獲ようと，懸命の努力をささげつゝありました。もとより私は適當なる靈媒能力の所有者ではありません。私の頭脳は極端な常識づくめに出来上つて居り，脚はいつも地面の上を離れません。が，常識黨である丈それ丈，一度自分で靈的體験を嘗めて置かないと，何うしても気が濟まないので

した。幸ひにして私の同僚の宮澤理學士（虎雄）は私より先きに神懸り状態になり，熾んに靈言を以て私を鞭韃してくれ，最後に私に取りて貴重なる靈視能力の體験を恵んでくれました。當時の記事を抜萃します。——

（私の靈現能力の體験）——宮澤理學士の守護靈は威儀儼然として，審神者（きにはの）の位置にある私を眼下に見おろしながら命令するのであった。

『浅野はまだ精神統一ができてゐない。この方が，これから汝を鎮魂してやる。ねむれ！』

自分はその頃他人を鎮魂してやるばかりで，自分の修行のできないのが不満でならなかった。何といふ割のわるい役割に當つたものであらう……。さう私は考へて居た。ところが今思ひも寄らず，自分の養成した神憑（ひよう）者から，鎮魂してやると言はれたのだから，いさゝか無気味な話であつたが，他方に於て占めた！　と歡ばざるを得なかつた。とうとう言はるゝまゝに，審神者の自分が眼を瞑つて坐り込み，そして神憑者の宮澤君が自分を鎮魂するといふ奇現象を呈するに至つた。（中略）

しかし宮澤氏の守護靈は一生懸命，力一ぱい，勢一ぱいの努力を私の鎮魂に拂つてくれた。真紅になってウンウン気合をかけて，時々大きな聲で奴鳴りつける。

『浅野，汝は何故さういろいろの事を頭脳の中に考へるか！　それでは統一ができん！』

まるで平生の宮澤理學士の音聲とは似てもつかぬ。権柄づくの大音聲である。人格がすつかり變り切つて居る、それを眼のあたり見るにつけても，自分の頭脳の中はつくづく憑靈現象の微妙不可思議を痛感せずには居られなかつた。

ところがその事實が先方の守護靈には感應するものと見えて，二三十分間坐つてゐる中にも，何回となく叱言（こごと）が出る。

『こらツ！　又そんな事を考へて居る！　可（い）かん！』

可笑しくなるので私が微笑を浮べると，先方ではますます怒ると言つたやうな有様，第一回の鎮魂はすっかり失敗に終つた。

けれども宮澤君の守護靈は容易に匙を投げない。二度，三度，五度と幾晩かに亘りて根気よく同一事を繰りかえしてゐる中に，次第に効果が現はれて來た。多分第七回か第八回目かの時かと記憶する。顯著なる變化が自分の軀に起つて來た。先づ組める両手が全く感覺を失つて了つた。やがてそれが腕に及び，胴體に及び，足に及び，總身は全くその存在を失つて，さながら空中に浮べるが如く，畳の上に坐つてゐるといふ感じは少しも失くなつた。が，肉體の感覺の，かく蕩盡されたのに反し，不思議にも頭脳の中は冴えに冴えて，木の葉一枚，針一本の動くのも聴きのがすまじき透明照徹の状態に齎らされた。

『ふむ，これが禅坊主などの狙（ねら）つてゐる境涯だナ。』自分の頭脳はどこやらでしきりに働く，『面白いものだ。まるで軀の所在地が判らない，自分の頭部がどこにあるのかもはッきりしない。そのくせ自分は立派に存在し，何所かで自己の肉體の無感覺になつたことを客観してゐる。この分なら今晩はうまく行きさうだ。そろそろ何物かを視ることができるかも知れぬ……。』

すると，この時不圖自分の眼の裡に，一種の變化が起りつゝあるのに気がついな。閉ぢたる眼の裡が急に明るく且つ奥深く感ずる。最初に赤や紫などが勝つて居たが，だんだんそれが蒼ずんで來た。例へば波しづかなる青海原，ただし晴れ亘れる秋の夜の空——そんなものを聯想せしむる感じである。その状態が，何秒つゞいたのか，又何分間に亘つたのか自分には判らない。と，忽然として，その蒼碧の雰圍気の裡に一個の人の姿が現はれた。

『オヤツ！』

と自分は，且つ驚き且つ怪しみ，一心にその姿を凝視した。距離は自分と約一間許り離れてゐる。身には衣冠束帯をつけ，やゝ斜めに自分と向き合つて立つてゐるが，しかし俯目

勝にしてゐるので視線とは一致しない。年齢は先づ五十有餘，豊頬にして長髯，畏れ多い話だが，ちらと見た瞬間の第一印象は某大宮様かと思はれたが，よくよく見ると大分異つてゐるのを発見した。少しづゝ動いてゐる。

『これが所謂靈魂かな……』

と，いふ考が自分の頭脳に雷光の如く閃く。

『一たい何人の靈魂かしら？』

と，つゞいて疑問が起る。何れにしても，よく見て置かうと思う瞬間に，煙の如くその姿は眼底から消え失せて了つた。その出現してゐた時間はよく判らないが，多分一分間か二分間位であつたらう。

鎮魂を終つてから自分は宮澤君の守護靈に伺ひ，今私の眼に映じた靈魂の何人なるかを質問すると，大喝一聲

『汝自身の守護靈ではないか！』

自分が自分の守護靈なるものゝ姿をゆつくり視たのは實にこの時が最初であつた……。」

では浅野氏にとって“カミ”とはどのように考えられたかを，同じく同氏の『心霊講座』から引用しよう。

「先ず『神』の観念が近代心霊研究のお蔭で非常にはっきりして來ました。従來は用語の不詮索，偏狭なる人種観念，又活きた研究資料の不足等に累せられて，ともすれば一流の碩学長老までが幼稚な愚論を闘はして居りましたが，その厭ふべき傾向は先づ世界の心霊論者の間から消滅するに至りました。宇宙の一切の万物を顕現せしめた根源の大霊――これがいふまでもなく真の神で，キリスト教徒の所謂ゴッドであり，仏教の所謂真如であり，儒教の所謂天であり，日本古神道の所謂天之御中主神であります。従來はヤレ一神教だの，多神教だの，ヤレ有神だの無神だのと，下らぬ議論を闘はして居ましたが，実は古來世界の各国がその根本観念に於て悉く一致して居たのであります。（中略）

日本の所謂敬神の一語の中には勿論天之御中主神以下の諸神靈，キリスト教徒の所謂天使達に対する崇敬の意義までも包含されております。……日本の八百万神の思想を以て幼稚だなどと思つたらそれこそ滑稽で，心霊研究が進めば進むほど，この思想は一層光輝を発するのであります。」

宗教と心霊科学との関係は必ずしも簡単ではない。日本の場合には相当程度の拒否反応があるが，改めて述べるまでもなく新約聖書は極めて心霊的で，このことはタルムードなどと比較し特徴的なことである。ハイズヴィユ事件（1848年３月31日）以来すでに140年近くが経過しており，宗教研究者も何等かの意味で，心霊科学の現況について知っておく必要があることは確かである。

Ⅰ―(8)　谷口雅春著『生命の実相』（自伝篇）(注13) **から**

昨年（1985年）６月に91歳で死去された谷口雅春氏（明治26年～昭和60年）は宗教法人「生長の家」の創始者として知られている。同氏にはぼお大な量の著作があるが，その自伝から見神体験に関する部分を引用しておこう。

「わたしは思索を重ね，静思を重ねたけれども安住の境地には達しなかった。

ある日，わたしは静座合掌瞑目して真理の啓示を受けるべく念じていた。わたしはその時，偶然であろうか，神の導きであろうか，仏典の中の『色即是空』という言葉を思い浮かべた。と，どこからともなく声が，大濤（おおなみ）のような低いが幅の広い柔らかで威圧するやうな声が聞えてきた。

『物質はない！』とその声は言った。で，わたしは『空即是色』という言葉をつづいて思い浮かべた。

と，突然その大濤のような声が答えた。『無よりいっさいを生ず。一切現象は心の所現にして本来無。本来無なるがゆえに，無よりいっさいを生ず。有よりいっさいを生ずと迷うがゆえに，有に就して苦しむのだ。有に就せざれば自由自在だ。供限無限，五つのパンを五千人に分かちてなお余り，『無』より百千億

万を引き出してなお余る。現象界は念のレンズによって転現せる化城にすぎない。かしこに転現すると見ゆれどもかしこに無し。ここに転現すると見ゆれどもここに無し。知れ，一切の現象無し。なんじの肉体も無し。』

では，心はあるであろうかと思うと，その瞬間，『心もない！』とその声は言うのだった。今まで，わたしは『心』という得体の知れない悍馬があって，それを乗りこなすのに骨が折れると思っていたのだった。ところが『心もない！』という宜言によって，わたちは，その『心』の悍馬から実相の大地に降りたのであった。

『心もなければ何も無いのか』とわたちは再びその声の主にたずねた。

『実相がある！』とその声はハッキリと答えた。

『無のスガタが実相であるか、皆空が実相であるか』とわたちは尋ねた。

『無のスガタが実相ではない。皆空が実相ではない。皆空なのは現象である。五蘊が皆空であるのだ。色受想行識ことごとく空である！』

『空と無とは異なるのではないか』とわたしはたずねた。

『空と無と異なるとは思うな。五蘊皆空であるのに空とは無ではないと思うから躓く。空を無とは異ると思い。『無ではない』と思うからまた『五蘊も無いではない』と引っかかるのだ。『五蘊は無い』とハッキリ断ち切ったところに，実相が出て来るのだ。無いものを無いとしたところに，本当のアルモノが出て来るのだ。』

『では，実相とは何であるか』とわたしは訊いた。

『実相とは神である。あるものはただ神のみである。神の心と，神の心の顕現のみである。これが実相だ，ここで神というのはむろん『仏』という意味も含んでいた。

『心も無いのが本当ではないか。』

『無い心は受想行識の心だけだ。そういう意味でなら仏もない，衆生もない。心，仏，衆生三無差別と説く場合には，心もない，仏もない，衆生もない。衆生を抹殺し，仏を抹殺し，心を抹殺し，いっさい無いといっさいを抹殺したときに，実相の神，久遠実成の仏が出て来るのだ。』（中略）

わたしの眼の前に輝く日の出の時のような光が燦爛と満ち漲った。何者か声の主が天空に白く立っているように思われたが，それはハッキリ目えなかった。しばらくするとその燦爛たる光は消えてしまった。わたしはポッカリ眼をひらくと，合掌したまま坐っている自分をそこに見出したのであった。

それ以来，心，仏，衆生三無差別の心というものが本来無いものであるということがわたしにハッキリわかった。迷う心も無いから，悟って仏になる心もない。迷う心が進化して悟って仏になると思っていたのがまちがいであったのである。たゞ初めから仏であり，神である『実相の心』があるだけである。（『生命の実相』（頭注版）第20巻「自伝篇下」）

正確を期するため，若干長い引用となったが，では同氏にとって“カミ”とはどのように考えられているかを，同じく引用によって見てみよう。

「日本語でカミと申しますのは，

第一に創造神のことを申すのであります。この語源は「醸む」といって「上」と「下」とが和合すること，天と地が結び合うこと，陰と陽とが触れ合うことによって事物を生み出す愛の働きをいうのであります。……愛のはたらきによって造り出し給う霊妙なる「創造の原理神」が第一義のカミであります。

第二に，われわれがカミと申しますのは「輝く身」すなわち一つの発光身をいうのであります。一燈園などでは「お光り」といっています。仏教では「不可思議光」といったり「無礙光如来」といったりしています。……この神は本来それは真如法身（観自在原理）そ

のものであって相(かたち)がないのであります。たゞ救うてくださいと呼ぶ者があるので，真如界から救いの求めに応じて発光身となって観世音菩薩のごとく機に応じていろいろの姿に顕現せられる如来であります。キリスト教でいうエンゼルの多くはこれで，唯一根元神から投げかけられた「救いの霊波」が形体化して顕現したものであります。

第三にわれわれがカミと申しますのは幽(かく)り身(み)の略称であります。すなわち肉眼で見える体は備えていないけれど，体がないのではなく幽微(かすか)な身を備えているのであります。この階級の神の種類は千差万別であって，低きものにはまだ悟りを開かない人間の亡霊や動物霊などがあり，高きものにはズッと高い神界に住む神霊を得た人霊があるのであります。仏説ではこの世で善因を積んだものは『天』に生まれると申しますが，この諸天にいます神々はすべてこの幽り身に属する神々であります。」

そしてさらに「同じ言葉で別々のものを指して，互いに「一神」だ「多神」だと論争していても結局解決のはてしがないのであります。」とする。(『生命の実相」(頭注版) 第2巻から)

同氏の立場は光明思想と呼ばれるが，また「万教帰一」の立場であり，その立場からの仏典や福音書の解説も多い。その立場を最もよく示すものは「大調和の神示」とよばれるものである。

同氏は一時機大本教に関係し，また浅野和三郎氏の心霊雑誌に寄稿し編集にもタッチした。その立場は，仏教，キリスト教，神道の他にスピリチュアリズムやニュー・ソート，また精神分析などを含む。

同氏自身，ウィリアム・ジェイムズにも言及するが，その立場はジェイムズの言う「健全な心の宗教」(Religion of Healthy Mindedness) の立場と言えよう。なお盤珪禅師の立場もこの立場であり，結果的に中古天台で最も発達した本覚思想に通ずる。

同氏はまた，人間は神の子であり，それ故に神であると言う。この種の表現は西方キリスト教会では表現しにくい。但しギリシャ正教では「神が人となったのだから，人も神となれる」，と言うアタナシウスの主張に一層重点がおかれる。聖と俗，また終末観についても，また「黙示録」の扱いの違うギリシャ正教の主張を，現代の比較文化の立場では，十分に考慮して考えなければならない。

II—(9) 本山博著『密教ヨーガ』(注14) から

本山博氏（大正14生）は宗教心理学研究所を主宰し，また同氏の義母が創設した玉光神社の宮司であり，またヨーガの道場を開設している。

ヨーガによるチャクラの目覚めについて考えるため，同氏の「私のチャクラの体験」『密教ヨーガ』からサハスララチャクラ（頭頂のチャクラ）の目覚めについて述べる部分を引用しよう。

「ヨーガの実修をはじめたのは，今から27年まえのことです。はじめは，毎朝3時に起きて30分ほどヨーガの体操をし，4時から7時，8時ごろまで坐って，まずプラナヤーマ（プラナのコントロールの意味）をし，精神集中を試みました。……。なにしろ当時は25歳という若さでしたから，ひたむきに，純粋にヨーガの行に励みました。始めて二～三カ月頃から，身心にすごくエネルギーが充実してきた感じがしました。(中細)

ヨーガ行を始めてから半年か一年経ったころ，金色に輝く光が頭頂から出たり入ったりするようになりました。そして頭頂が10～20センチも上に突き出したような感じになりました。肉体の次元でなく微細身の次元で，頭頂に仏頭のマゲのような形のものが，紫色またはブルーに光って突き出しているのが見えるのです。

その頂に門があり，そこを通って金色または白色の光が，天から出入りするのが見えま

す。見ているうちに身体の感覚がなくなりましたが，意識（超意識）ははっきり目覚めていて，自分の霊的存在がその門を抜けてしだいに高みにのぼり，はるかはるか彼方の上方におられる神のもとに還っていくのがわかるのです。

宇宙にひびきわたる力強く優しい，神の声が聞えます。自分の使命，自分の前生，自分の境位などが，神の御声を聞くうちに自然とわかってきます。それからは，えもいわれない法悦と平安のうちに，自分の霊的な全存在が埋没しているような状態が続きます。

しばらくして，もう地上の肉体に還らなければならないときだと感じます。そして上昇した光の道をまた降りて，頭頂の門を通って身体の内に戻ってきます。身体のすみずみにまで，霊の働き，その力をゆきわたらせなければなりません。身体は少し冷たくなっていて，手足がマヒしてこわばっており，すぐ思うようには動きません。手足を少し動かしてみてしだいにふつうの状態にもどります。

（中略）……サハスララの目覚めが高まるにつれて生まれてきた能力は，次のようなものがあります。

他人の身体に入り，その身心に影響をおよぼすことができるようになりました。自己の存在が拡がり，多くの人や物を自己の中に包摂することが，より広く，自由に出来るようになりました。また，カルマからの離脱や，肉体の束縛を離れて自由に活動することが，より広汎に，より自由にできるようになりました。さらに神との合一がより高い次元で行なわれるようになりました。」（『密教ヨーガ――タントラヨーガの本質と秘法』から）

チャクラの種類や，その目覚のための座法などについては，現在では多種多様の著書が刊行されているのでそれらについて見られたい。また真言空教の修法との関係などについても，説明を省略するが関係書について見られたい。(注15)

玉光神社は天津神の七柱を一体として祭る。創唱者・本山キヌエ教祖の見神体験については『玉光神社教祖自叙伝』(注15)に詳しい。同書には瞑想体験の際の表象を図示したものが添えられて居る。

II―(10) 石井晋雄著『最後の超念力』(注16)から

最後に，突然に或る種の超能力が与えられたケースとして石井晋雄氏（大正７年生）の場合について考えてみよう。

「(昭和)50年の２月のことだった。突然不可思議な体験がわたしを襲った。

その頃のわたしは殖産住宅の大阪支店に勤める平凡なサラリーマンだった。人並の苦労をして，人並の平安を得た定年まぢかの営業マン，と言っていいだろう。しごとはいそがしかったが，それなりに幸福だった。定年後は郷里の佐賀へ戻ってゆっくりくらそうと思っていた。

ところが，２月１日の夜，フロに入ったら突然からだがカーッと熱くなった。

血圧が高かったから，もしかしたら倒れるんじゃないかと心配した。とにかくからだが熱くなって，グングン膨れてゆく。あわててわたしはフロから出た。それまで病気というのをしたことがなかったから，もしかしたら，という心配があった。

それでフトンを敷いて，からだをすぐに横にした。

それからどれくらい時間が経ったのか，はっきりしないのだが，少しウトウトして眼を醒ますと，左手がひとりでに持ちあがって宙に字を書きはじめた。

意識ははっきりしているのだが，からだは硬直して動かない。ただ指先が字を書いてゆく。

〈ヨガキ，ヨガキ……〉。

それが宙に浮いた文字だった。

わたしはなんのことかわからない。エライことになったという驚きばかりが先行して，

ただ暗い部屋で息をひそめていた。

するとそのうち，指先の動きが変わって，〈タスケ，タスケ……〉になった。

そのときようやく，わたしは，もしかすると神が人助けをしろ，とわたしに啓示を与えているのではないか，と気付いた。証拠はなかったが，そうだろうという確信がわたしのなかにはあった。

直観，だ。

わたしはその自分の直観に素直になろうと思った。

それからわたしに不思議なパワーがそなわるようになった。だからいまでも，これはわたしの力ではない，と思っている。」

この時以来，石井氏には或る種のパワーがそなわるのだが，同氏はそのパワーは自分が何等かの修業をしてさずかったのではないので，それを他人に与えることができると言う。

その方法としては，一般には，テープ(ESPテープとよんでいるが）を聴くことによって得られるとするが，それをたゞちに他人に与えることもできると言う。

「余談になるが，人伝えに，『白日沖天の術』，というのが古伝書に載っていると聞いたことがある。中国古来の，仙道の秘法だそうだ。

古伝書によれば，それをきわめれば仙人になれるという仙道の極意は，いかなる修業をもっても体得できない，という。

では，どうするのか……。

そこで秘伝中の秘伝，『白日沖天の術』が使われるのだ。

これは，師である仙人から弟子に一瞬のうちに極意を伝授する秘術。

この『白日沖天の術』の存在を思えば，2分間で力を授けることのできるわたしの不思議も，それなりにわけのあるものなのかもしれない。」

日本において道教的なもの，たとえば地仙といった考えが，どれだけ受け入れられるかは興味のあるところだが，道教についてふれているめずらしい例として注目したい。同氏によれば“カミ”とは「人格的エネルギーである」とされる。

なお念のために，もう二カ所ほど引用しておこう。

「わたしはほんらい神仏は信じない。たゞ宇宙のエネルギーと言っても漠然としてよくわからないから，神の力，と言いかえただけだ。」

さらにまた「……悩みに直面している人は，一日も早く苦しみから脱出したいと願い，また努力もするのだが，たいていは考えれば考えるほど暗い深みに落ち込むばかりとなる。人が神仏にすがるのは，そのためだ。わたしは（前に書いたとおり）宗教を信じない人間だ。たゞ信仰による功徳がまったくない，などと言い切るつもりはない。それはあるかもしれない。少なくとも，人が神仏を信仰し，信心し，修業する姿は美しい。たゞ，あまりにも厳しい。信仰がたいへんなことであるのは，読者の方がよく知っていることだ，と思う。」

確かに修道はきびしい。このことは盤珪禅師，白隠禅師から本山氏の場合にいたるまで，今回の引用からも十分にうかがわれる。では易行道と言われる他力の信仰においてはどうかと言えば，実は信じていると言い得ることもまたむずかしい。それ故に一遍上人の様に，信じなくてもよいから念仏するようにといった教えが，結論として生れてくる。

はじめに引用した盤珪禅師が己れの修道について語られる言葉の前に「身共がやうに骨をおらねば，法成就する事はならぬやうに思はしやって，骨を折ますれば，身共が科(とが)でござるによって，咄(はな)せて聞かせたうはござらねども……。」（龍門寺本）と説かれている。

石井氏の言葉は，現代人と宗教とについての根本的問題にふれている。

以上，10の場合(ケース)について，主としてその自

著からの引用により考えて来たが，10人の選択については，紙数の関係からの制約もあるが，いずれも筆者にとって，貴重なドキュメントとして引用したもので，その多くが宗派や教団内ではとくに尊重されるもので，その一部の引用について御寛容を乞いたい。

今回は，日本の近世以降の場合にのみとどまったが，ユダヤ・キリスト教的，またイスラムの神秘思想家，さらにヒンズーや中国における諸ケースとの比較が必要であろう。最近になってとくに注目したいのは，比較的に紹介されることの少なかったギリシャ正教における場合である。

今回の引用部分には，トラインの様に“カミ”を法則として考える立場は，必ずしも明確には現われて来なかったが，コドリントンの言うマナとしての“カミ”などともに，現在ではしばしば説明根拠として用いられる。

宗教現象の説明の際に，マナ，人格神，法則との関連で潜在意識またはそれと類似の考え方が用いられるのは，機能についてか，主体についてか，その“場”についてかの相違であり，どれを説明の主要原理とするかは，体系の性格の違いと考える。そしてそこには暗々裡に異った真理観が前提される。

今回の説明では一切ふれなかったが，こゝに引用した先人の追体験の方法として，いくつかの修道の方法があるが，禅，念仏，ヨーガ，鎮魂などについてはよく知られるが，「祈りと坐禅観法を併せた」生長の家の神想観や，独特の意味を持つ円応教の修法などは興味のあるものであり，またESPテープといったものも，現在においてはじめて可能となったものであろう。

今回の問題において，同時代の諸例を考えることは必ずしも容易ではない。それは評価の分れることと，また体系が発展過程にある場合が多いからである。だが逆に，同時代であるがための了解可能の部分が多いと言うプラスの面も考えておく必要がある。

本稿は，はじめにも述べたように，広義の意味での見神，見仏，見性などの多様な具体例を，引用によって提示したもので，目下のところ，何等かの分類ないしはタイプ化は意図してはいない。今回はこの問題における多様さと，今後の考察における何等かの共通理解の場と資料の提供にとどまる。此の種の問題については，先ずはそれを了解できるための広い観点を持つことが必要であるからである。

たゞ，紙数の関係で，必要最低限の説明も省略せざるを得なかったが，それらについては関連文献について見られたい。

注，（引用および参考文献）

注1　Russell, Bertrand : Philosophy of Logical Atomism, Monist, Vol 28, 1918.
この論文は何種類かのリーディングに収録されている。
日本語訳は，石本新訳編『論理思想の革命』東海大学出版会，1972年に収録されている。

注2　ラッセル，バートランド著，市井三郎訳『西洋哲学史』（下），みすず書房，1956年。原書にはペーパー・バックがある（Unwin Paperbacks, 1946年）

注3　前注1に同じ。

注4　Hartshorne, Charles : Man's Vision of God, Harper&Row, 1941

注5　『盤珪禅師語録』（岩波文庫）
戦後一部訂正の新版がある。
その他の写本の活字となった主要なものは，藤本槌重編『盤珪禅師法語集』春秋社，1971年に所載。その他については前稿の注について見られたい。

注6　『遠羅天釜』『白隠和尚全集，第5巻』龍吟社，1934年刊（新版あり）

注7　影印版は『金光大神覚』金光教本部教庁，1972年刊。同書は新教典，金光教本部教庁編『金光教教典』1983年にも所載。

注8　山崎辨栄著『人生の帰越』ミオヤのひかり社，1923年刊，戦後1975年刊の複刻版がある。参考文献としては山本幹夫著『辨栄尊者

の人格と宗教』大東出版社，1936年参照。

注 9　安倍能成編『綱島梁川集』（岩波文庫）1927年刊，『全集』は春秋社，1921～22刊。

注10　『御教祖様御遺文集』三巻，円応社，1949年刊，他に『円応教教典』円応社刊参照。

注11　浅和和三郎著『心霊講座』，心霊科学研究会，1928年刊，潮文社より新刊（1985年）がある。

注12　谷口雅春著『生命の実相』（頭注版）第20巻，日本教文社，1963年刊。

注13　谷口雅春著『生命の実相』（頭注版）第２巻，日本教文社，1962年刊。

注14　本山博著『密教ヨーガ――タントラヨーガの本質と秘法』宗教心理出版，1982年刊

注15　本山キヌエ著，本山博編『玉光神社教祖自叙伝』宗教心理学研究所，1975年刊。
ヨーガと密教との関係については，山崎泰広著『密教瞑想法』永田文昌堂，1974年刊参照。

注16　石井晋雄著『最後の超念力』徳間書店，1984年刊。

（付）　円応教の修法については，林知己夫，米沢弘共著『日本人の深層意識』（NHK ブックス）日本放送出版協会，1982年刊に述べた。同書には「踊る宗教」として知られる「天照皇大神宮教」についても述べたので併せて参照されたい。